

東大寺文書の形成と伝来に関する基礎的研究

森, 哲也

<https://hdl.handle.net/2324/1500436>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2,3）

氏名	森 哲也			
論文名	東大寺文書の形成と伝来に関する基礎的研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	坂上 康俊
	副査	九州大学	教授	佐伯 弘次
	副査	九州大学	教授	岡崎 敦
	副査	九州大学	准教授	岩崎 義則

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本における大文書群の一つである東大寺文書について、その形成から現在に至るまでを射程に入れつつ基礎的研究を行ったものである。

第一部は、東大寺文書の文書群としての全体像の復原を目指したもので、第一章では、印蔵保管文書の台帳と言える仁平三年目録を取り上げ、原本調査を踏まえつつ、印蔵における具体的な文書保管のありかたを論じた。

第二章では、その印蔵保管文書の動態を示す出納日記の復原と、日記掲載文書の比定に取り組み、出納日記の書式の三期にわたる変遷、題籤をもつ往来軸と別当との関係、出納に立ち会った僧侶の立場等を明らかにし、保管文書が、特に荘園経営との関係で、寺外・寺内に対する証拠書類として機能したこと、出納日記の終焉が公験としての効力の喪失と関わることを指摘した。

第三章および附論では、近世～近代における点検記録の分析を通じて、東南院文書、東大寺文書の現状の成立過程を明らかにし、第四章では、平安期の正倉院にかかる史料を、従来等閑視されていた写本から検出、明治初頭における東大寺文書の状況や、国学者・好古家のネットワークの一端を解明した。

第二部は、東大寺の末寺となった観世音寺の文書を分析の対象とする。第一章では、各種文書目録、出納日記と現存文書を対照させつつ、文書群としての全体像把握に努め、印蔵からの出納を分析することにより、東大寺による末寺・寺領支配の動向を浮かび上がらせた。第二章では、内容の一部が未確認であった観世音寺公験案について、新出史料を紹介・検討し、第三章では、後世の写しとされてきた『観世音寺資財帳案』が、実は未完成の原本であることを明らかにした。第四章では、観世音寺公験案の記載から、「延喜の奴婢停止令」の実態を明らかにした。第五章、同附論では、近世～近代における観世音寺文書の状況について考察を加えている。

このように本論文は、観世音寺文書を含む東大寺文書の伝存・活用の状況を解明したものであり、基礎的事実の確定とともに多くの新しい解釈や論点を提示したものと評価できる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。